

新しい生き方

丸山 勉

【聖書】 ガラテヤの信徒への手紙 1章 1～10節

人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ、ならびに、わたしと一緒にいる兄弟一同から、ガラテヤ地方の諸教会へ。わたしたちの父である神と、主イエス・キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように。キリストは、わたしたちの神であり父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわたしたちの罪のために献げてくださったのです。わたしたちの神であり父である方に世々限りなく栄光がありますように、アーメン。

キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。ほかの福音といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キリストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。しかし、たとえわたしたち自身であれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知らせようとするならば、呪われるがよい。わたしたちが前にも言っておいたように、今また、わたしは繰り返して言います。あなたがたが受けたものに反する福音を告げ知らせる者がいれば、呪われるがよい。こんなことを言って、今わたしは人に取り入ろうとしているのでしょうか。それとも、神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、何とかして人の気に入ろうとあくせくしているのでしょうか。もし、今なお人の気に入ろうとしているなら、わたしはキリストの僕ではありません。

【序】 パウロの鼓動が聞こえてくる手紙

使徒パウロの二つの手紙を、今日から6月末までご一緒に味わってゆきたいと思います。「聖書教育」誌が取り上げているのは「ガラテヤの信徒への手紙」と「フィリピの信徒への手紙」です。どちらもそんなに長い手紙ではありません。けれども、ここにはパウロの個性、生き方が明確に現われていると思いますし、何と少しでも伝えたいメッセージ、それがパウロの鼓動のように聞こえてくる手紙だと思います。そして印象的な言葉に満ちている手紙です。私も、読むたびに熱い思いが湧き起こってくることを感じます。まずは、何週間か「ガラテヤの信徒への手紙」をご一緒に味わっていきましょう。

【1】 八百万(やおよろず)の神を信じるほうが良い？

一週間前のイースターの日曜日、インド近くのスリランカの国で酷いテロ攻撃の事件が起きました。いわゆる「イスラム国 (IS)」の犯行だと言われていますが、

日本人女性も巻き込まれて死亡し、またそのコロombo市内の教会でイースター礼拝を捧げていた多くの現地の人々が命を落としました。犠牲者の人数は、250名を超えられます。先日その事件について語っていたラジオを聞いていたら、著名な芸能人が、これがキリスト教会を狙ったということから、「なぜ宗教同士の争いは絶えないのか。寛容になれなければ宗教の意味がないではないか」と話をされ、さらには「日本の“八百万(やおよろず)の神”という考え方は広まるといいのに」と語っていました。そして他の番組出演者もそれに頷いていたのです。まあ、驚くことではないのかもしれませんが、ちょっと残念な気持ちになりました。私としては、この私たちの国の、いわば一般的な「宗教性」を垣間見た思いが致しました。

もちろんテロが良いとは全く思いませんが、しかし、だからいわゆる一神教は危険で、おおらかで曖昧な、と言いましょか、そのような八百万の神を信じる信仰の方が人間的である、という考え方はどうなのでしょう？ それは“習俗”と言えるのかも知れませんが、一人の人間として神様の前に立つ、という自立した信仰となり得るのだろうか、もっと言えば、真に私たちを支え、生きる力を与えてくれるものになるのだろうか、と思いました。

[2] パウロの新しい出発

それでは、真の信仰、真の信仰者とは何なのか、それをパウロという人物を通して少し見てゆきたいと思います。

一般的に考えられがちな「宗教は危険」いう考え方からしますと、使徒パウロという人物は、大変一直線で、ある意味融通がきかない「危険人物」になってしまうかも知れませんね。しかし、もちろんパウロはテロを扇動するような人物ではありません。キリスト教徒が、他宗教を信じる者を叩いたり攻撃したりすることがあれば、それは本当の信仰者とは言えないと思います。それは自分本位の思いや差別、罪を、「宗教」という衣を着ることで、正当化しているに過ぎないのではないのでしょうか？

パウロは、そのような「自己本位」の思いに、イエス・キリストと出会うことによって気付かされ、そして砕かれた人、と言えらると思います。それまでの彼は、それこそ、大変キリスト者たちに対して攻撃的でした。皆さん、あのパウロの回心の出来事をご存知でしょう。彼は、「主の弟子を脅迫し、殺そうと意気込んで」いたと使徒言行録9章に記されています。そして、ダマスコにキリスト者たちを捕えようとダマスコに向かう途上で、彼は天からの光に打たれて地に伏し、目も見えなくなったのです。それ迄、私こそ真の神に仕える者だ、イエス・キリストが神であるなどというたわごとを言い広める輩は叩かれなければならない、それこそが私の神からの使命だと、そのことを彼は熱心なユダヤ教徒として疑っていませんでした。そして、そのように

息を弾ませていた彼は、光に打たれ、驚くべき啓示を受けたわけです。地に倒れ伏したパウロ（この時はまだサウロ）に、このような声がハッキリと聞こえました。使徒言行録 9:5 です。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである」。

死んだはずのイエスが、疑いようのない確かさを持って彼—迫害している彼—に直に語りかけたのです。——これが彼の**新しい生き方の始まり**でした。生まれ変わった、と言って良いでしょう。彼は、キリスト教の勉強をしたから生まれ変わったのですか？—いいえ。誰かから折伏されて、キリスト者になったのですか？—いいえ。彼はこの**ガラテヤの信徒への手紙**の**まず冒頭**で、このように自分のことを書いています。——「人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ」。（ガラテヤ 1：1）

「使徒とされたパウロ」と彼は言いました。「された」と、パウロは受け身で言います。主人公は自分ではないのです。「イエス・キリストと、キリストを死者の中から復活させた父」が、私自身を使徒として造り変えてくれたのだ、と言います。これが彼の「原点」です。自分の足の置き所です。これを言わないことには、彼は教会に対して、何も言う言葉を持ち合わせていないのです。

[3] 「宗教」の時代ではなく、「福音」がやってきた

パウロは、実はとても悲しい思いを持って、かつて自分が訪問し、良い関係を保っていたガラテヤ地方の教会に充てて手紙を書いています。6 節にこうあります。——「**キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほかの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。**」

何をあきれ果て、悲しがっているのでしょうか。「あなたがたは、**キリストの恵みから離れてしまっていないだろうか**」ということです。パウロは、皮肉的な言葉にも聞こえます、「**ほかの福音**」という言葉を使って、「**ほかの福音**」などというものがあるはずもないが、それに乗り換えようとは、あなたがたはこれまで一体何を聴いて来たのか、また、そんな真の福音に反することを語る者は呪われるがよい、と激しい口調で語っています。決して耳障りの良い言葉ではありません。しかし、ここだけは譲れません。パウロは真剣です。これは、福音が福音である生命線だからです。

彼はこれまで、**熱心な「宗教家」**だったわけです。ユダヤ教徒でした。ではユダヤ教が悪いのか？そうではありません。ユダヤ教がなければ、つまり、旧約聖書がなければ、新約聖書もありません。聖書は、ユダヤ教 vs キリスト教という構図ではないのです。もちろん、イスラム教 vs キリスト教という構図でもないのです。そうではなく、パウロは、**神の独り子キリスト**が来られた今、あなたがたは「**律法主義**」から解放されなければなりません、ということを語っているのだと思います。この

聖書は、「キリストの福音」(1:7) について語っているのです。それは、上からのもの、神様からのものです。人間の側からの「宗教(心)」を語っているのではありません。次元が違うのです。

いわゆる「宗教」の時代は終わったのだ。今や、キリストの恵みが支配している時だ、とパウロは言っているわけです。とても大胆なことです。何故そのようなことが言えるのかと言いますと、それは彼の体験に根ざしています。パウロは、先ほど読んで頂いたすぐ後のところ、1:13 以下で、自分に起こったことを語らないではいられませんでした。

「あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず…」。

パウロは、かつての自分の罪を隠しておりません。何故自分はかつてそんなに激しくキリスト教徒を迫害したのか。それが神様の前に正しいと思ったからですよね。現代のテロの問題と重なるところがあります。神の名において攻撃するわけです。神様を持ち出して自分の行動を正当化する。当時のパウロからすれば、イエス・キリストはユダヤ教の律法や言い伝えの枠からはみ出た存在であり、神様を冒瀆する存在であり、受容出来なかったのです。十字架を前にした祭司長たちや律法学者たちもそうでしたね。それでイエス様をまやかしの裁判にかけ、殺してしまったわけです。「律法主義」は人を生かすのではなく、人を殺すのです。また、神様を殺すのです。「律法主義」はいつしか、「おのれ」が神になってしまうのです。そして、それに気が付かなくて、滅びへの道を、ダマスコ途上のパウロのように前に前にと進んで行ってしまうのです。…しかし、そんなパウロに神様はストップをかけましたよね。地に倒された。それは彼にとって、「裁き」でもあり、また、驚くべきことに「赦し」でもあったのです。ここで、彼は、観念的な神様ではなく、生ける神様、復活のキリストと出会ったのです。これは、おとぎ話ではなくて、自分が変革されるという、とてもリアルな、神様のわざそのものです！私たちは、自分では自分を変えることは、実は出来ないのではないのでしょうか。

イエス・キリストの復活！それは、神様の愛と赦しのほうが、人間の罪に打ち勝って下さった出来事です。あの迫害者パウロを、神様は世界伝道者パウロに造り変えて下さったのです。神様は生きておられます。いくら人間がキリスト教会を爆破しよ

うとも、神様の愛は爆破出来ません。なきものに出来ません。人間は、キリストをずっと墓に留め置こうとしましたけれども、その墓を塞いでいた岩はいとも簡単に神様は打ち破って下さいました。主は、今生きておられます！これからも永遠に生きておられる神様として、私たちと共にいて下さいます。そして、言われるのです。

——「**疲れた者、重荷を負う者はだれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしのくびきを負い、わたしに学びなさい。そうすればあなたがたは安らぎを得られる。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである**」(マタイ 11:28~30)。——ここには、自分で自分をがんじがらめに縛ってしまう生き方(律法主義)からの解放があるのではないのでしょうか？その鍵は、キリストにお任せすること、そして、キリストご自身に聴いていくことではないでしょうか？

[結] 単純に生きる

パウロの書簡を読んで感じることは、パウロとて完璧な人間ではないことです。きっと近くにいた人は彼の激しさに怯えた者もいたと思います。けれども、本当に彼は、ただキリストを伝えるために、**愚か者のように**生きた、生き切ったと思います。あれだけ理論家のパウロですが、あの世界伝道の道のり、行動力には驚かされます。その途上、何度迫害を受け、瀕死の状態になったことでしょうか。しかしそれはただ、彼が、**自分ではない方に突き動かされた**ということなのですね。

15節で、パウロは、神様は「**母の胎内にいる時から**」わたしを選び、召しだして下さい、と書きました。つまり、今の自分がしていることは、自分の計画を遥かに超えたことだと言うのです。ここには**神様のご計画**の不思議さと確かさがあります。

この言葉を読んで思い出したことがあります。私は恐れをもって言うのですが、昨年ここで**牧師就任式礼拝**を捧げさせて頂いた時に、以前大泉教会の牧師だった松村誠一先生が「新しい丸山牧師を、神様は、母親の胎の中にいる時から選ばれて」というようなことをおっしゃり、驚いたことを覚えています。母が私を産んだ時、母はクリスチャンではありませんでした。ですが、そういう意味では無いのだなと思いました。「あなたは、あなた自身のものではないのだ、また、母親のものでもないのだ、神様が、不思議なご計画をもって形造って下さったあなたなのだ、だからあなたの力で進むのではなく、ただそのお方に聴き、愚かになって、信頼して進んで行きなさい」ということなのだなと思われています。

そして、これはもちろん、私たち皆な同じだと思います。ヨハネによる福音書 15:16 にあるように、**私たちが神様を選んだのではなく、神様が私たちを選んで下さって、今、生かし、神様の働きに参与するようにと召して下さい**なのです。例外なく、全ての信仰者をです！

私たちの人生、何十年あるか分かりませんが、信仰を与えられるということは、単純に生きるということなのかな、と思わされます。重荷はイエス様に預けて、軽やかにさせられ、ただイエス様に従って行けばよいのですね。

八木重吉のこんな詩を思い出しました。

**「キリストを信じて 救われるのだとおもい
ほかのことは 何もかも忘れてしまおう」**

——これが＜新しい生き方＞ではないでしょうか？

ご一緒に、与えられた信仰の歩みを、主と共に、また教会の仲間と共に、歩んでまいりましょう。

お祈りをお捧げ致します。